深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **本文で作者が好ましく思っている「花」「男女の情け」「月」の状態は、それぞれどのようなものか、まとめてみよう。**

【答】 花…満開のときだけではなく、今にも咲きそうなときや散ってしまったあとも好ましい。場合によっては花そのものを見ないで、その美しさを思うことも情趣がある。
男女の恋愛…うまくいったときばかりではなく、うまくいかなかったり、別れてしまったり、逢えなかったりしても情趣がある。
月…満月の曇りのないときだけではなく、欠けた月が木や雲に隠されて見えるのも趣深い。また、木の葉の上に光がきらめいているのも趣深い。
▼ポイント▲ 本文を正確に解釈したうえで、それぞれの情景を頭の中で思い浮かべさせるのもよいと考えられる。旧来の伝統的な価値観の中では必ずしも完璧とはいえない風景や事物の中にも美しさを見出す作者の態度を押さえておく。

2 **「よそながら見る」（三七・12〜13）とは、どのような態度のことを言うのか、考えてみよう。**

【答】 さりげなく見る、客観的な態度。
▼ポイント▲ 情趣を感じるその場にいると興奮状態となり、すべてが好ましく感じられることもあるが、その時期が過ぎてしまうと、どうしてあれほど熱狂したのかわからなくなることもある。盛りの時に、そのようなことを思い起こして、一歩下がって見ることを作者は求めているのである。そして、それが盛りだけを好ましく見るのではない態度につながっていくと考えられる。

言葉と表現の解答例

1 **次の傍線部の助動詞の意味と活用形を、それぞれ確認してみよう。**
(1) **咲きぬべきほどの梢（三六・3）**
(2) **はやく散り過ぎにければ。（三六・5）**

【答】 (1) 強意の助動詞「ぬ」の終止形　(2) 完了の助動詞「ぬ」の連用形
▼ポイント▲ 助動詞「ぬ」には完了と強意（確述）の二つの意味がある。強意の意味になるのは、後に「む」「べし」「らむ」「まし」などの推量系の助動詞が接続した場合で、それ以外は基本的に完了の意味になる可能性が高い。

言語活動の解答例

1 作者の論の立て方の特徴についてまとめ、その立論のしかたをどのように考えるか、話し合ってみよう。

【答】（意図）この段の論の立て方には特徴があるので、それを理解し、作者がどうしてそのような手法をとったのかを考えてみたい。

（手順）

1　作者の論の立て方の特徴についてまとめる。

　一般論を否定したうえで、作者独自の主張について説明していく。係り結びの結びの省略の部分がそれに当たるが、作者はまず一般論を否定する。それぞれの項目において、盛りのときだけに注目するのではなく、その前後にも情趣を感じるべきことを具体例を挙げて説明するのである。

2　作者の立論の仕方を肯定的に捉えるか、否定的に捉えるかを考えさせ、どうしてそのように捉えたかを説明させる。

　多くの論説文が一般論を否定するところから始めて、作者の主張に結び付けていることを考えると、作者のやり方を肯定する考え方となろう。まして、作者は一般論を完全に否定しているわけではなく、それを認めつつ話を広げるなど周到に論を準備していると思われる。一方、やはりそれぞれの項目における盛りの時期は逃してはならないものであり、その絶頂を味わえばそれでよいという、作者のやり方を否定する考え方も可能である。いずれの立場にせよ、根拠を持って各自の考えを主張することが肝要である。

（ゴール）現代の論説文にも通じる一般論と作者独自の主張との関わりをしっかりと読み取らせたい。その上で、どちらのやり方に説得力を感じるのかを判断しておくことは、自分自身で説明的な文章を書く際にも役立つであろう。

（畠山　俊）